■研究発表論文

淡路市岩屋地区における漁業集落の特徴的な景観とその特性について

The Landscape and its Characteristics of a Fishing Village in Iwaya District, Awaji City

林　ひろみ*　　林　まゆみ**

Hiromi HAYASHI　Mayumi HAYASHI

Abstract : The purpose of this study is to explain how the lifestyle of residents in a traditional fishing village in the Awaji island affects landscape. I examined the structure and features of the landscape, and the differences in evaluation on the landscape between the residents in this area and people living outside the island. The method used in this study was questionnaires. I also asked about the background of culture and lifestyle at the interview in this area, being surrounded by the mountains and the sea, this area is densely populated in the very narrow strip. Many narrow alleys are splendid from the harbor to the mountain. Between the alleys we can see the sea, and the mountain at many points. Besides, we can see various components of the landscape including fishing, boats at the same time. The residents don't place importance on the surrounding landscape that forms residents' usual life. That means people don't evaluate on familiar places as appealing. During the hearing survey there, I found out residents' life in this village. By keeping a traditional community like this village for such a long time through fishing rich landscape and scenery would have been kept by keeping the historical lifestyle.

Keywords: *fishing village, community, cultural landscape, lifestyle*
キーワード：漁業集落，コミュニティ，文化的景観，生活様式

1．研究の背景

(1) はじめに

我が国の漁業集落の立地をみると，漁港背港集落の2割が離島地域，3割が半島地域に位置し，また3割が急斜面の地形で自動車交通可能道の未整備等，生活基盤整備の立ち遅れが指摘されている。農山村と同様，少子高齢化や人口減少も問題となっている。

漁業集落は，集落の立地や生活環境上の問題が指摘されているが，多くが海と山に囲まれた狭隘な平地に密集した集落を形成しており，その漁業という生産形態や居住形態の特性から，農村以上に強い共同体的性格が維持されてきたといわれている[1)]。

近年，地域の生活や産業，風土により形成される景観である文化的景観として，漁業集落の景観も捉えられ始めている。高知県高岡郡中土佐町の久礼の港と漁師町の景観や熊本県天草市崎津の漁業集落景観が漁ろうに関する景観地を含む複合景観として，平成23年に初めて国の重要文化的景観に選定された。

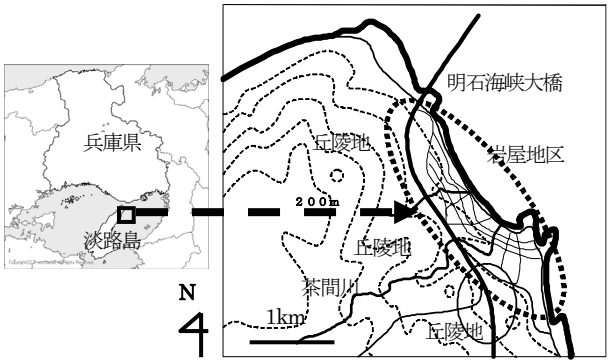
歴史的な建造物や漁業という営みだけでなく，漁業集落の生活文化から派生する生活のあふれ出しや路地園芸，つきあいの場など，地域住民の生活を感じることができる風景もまた，漁業集落らしい風景として機能し，存在意義があるのではないか。本研究は主として漁業集落における，生活の中で醸成されてきた景観の成り立ちやその意味するところについて考察した。

漁業集落に関する既往研究に，小泉[2)]や長坂[3)]などによる集落の屋外空間の構造に関する研究がある。また，路地における生活のあふれだしに関しては，青木・湯浅[4)]や路地園芸に関してのYoshida[5)]の研究などが，また路地空間の利用と住民間のコミュニケーション等の関係については金・高橋[6)]の報告もある。しかし漁業集落での生活を背景とした空間を景観要素として分析する研究は殆どない。本研究では，兵庫県淡路市岩屋地区を事例として，漁業集落における生活を背景とした景観要素とその特性を抽出し，それらに対する地域内外の評価や，景観要素を生み出す生活実態を明らかにしてそれらの景観要素とその意味性を探った。

(2) 対象地について

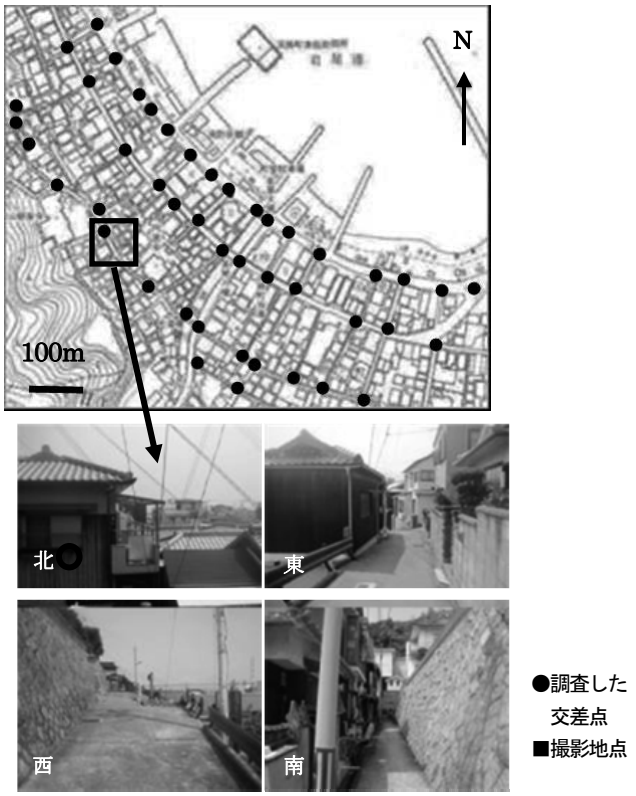
研究対象地として，淡路島の最北端に位置する兵庫県路市岩屋地区を選定した（図－1）。岩屋地区は，西に播磨灘，東に大阪湾，そして北に明石海峡に接し，水産業が盛んな漁業集落である。面積は13.2k ㎡,2,184世帯，人口は5,777人である（平成17年度国勢調査より）。65歳以上が1,732人と29.9%に達し，高齢化が進んでいる。海と山に囲まれた岩屋港を中心とした狭小な平野に人口が集中しており，総面積のわずか6%にあたる0.8k ㎡に人口の8割が居住し，密集市街地を形成している。既存の密集市街地に加え，その山側に，新たに住宅地が開発されたり，また明石海峡大橋や高速道路とそれに伴う施設等，近年大きな景観の変化がもたらされたりした。集落の後背に丘陵地，山が控えている[7)]。

漁業については，岩屋地区が属する淡路町漁業協同組合員数は，269人と淡路島内の漁協の中では最も多く，漁獲量の合計についても，旧淡路町は5，487ｔと淡路島の中でも最も多い等，島内においても漁業の盛んな地域であることが分かる。また2次産業における造船業や食品加工業，第3次産業における釣り船や海産物卸売業など水産業を基盤とした他の産業も発展してきた[8)]。



図－1　岩屋地区の位置と概況図

*　神戸市役所　建設局公園砂防部　**　兵庫県立大学　緑環境景観マネジメント研究科/淡路景観園芸学校



図－2　交差点での調査の一例

2．研究方法

研究方法としてはまず対象地の歴史についての調査を行い，次に，地区の特徴的な景観の抽出として，密集市街地での画像の収集による悉皆調査とその分析，岩屋地区の景観に対するアンケート調査を，そして景観の背景となる地区住民の生活実態の調査等を行った。

(1) 対象地の歴史についての調査

岩屋地区の集落の形成や地理的，及び漁業を中心とした歴史的な概容を文献や，ヒアリングにより調査した（ヒアリングは，調査３）を参照のこと）。

(2) 地区の特徴的な景観要素に関する調査

1）密集市街地の全ての交差点での調査（悉皆調査）

本研究では，住民の生活から生まれる景観要素を抽出するため，住民が日常使う道から見える景観に注目した。恣意的に選ぶのではなく，客観性を持たせるために，岩屋港を中心に広がる密集市街地の全ての交差点から４方向の写真を全て撮り，その中で景観構造や要素を確認した（図－2）。現地写真調査対象区域は，既存の密集市街地で，海岸沿い約 1.6ｋｍ，海岸から約 330m の範囲となった。交差点の総数は 256 箇所，1024 枚の画像データを収集し，その特徴について分析した[9]。

2）岩屋地区の景観に対するアンケート調査

平成 23 年（2011）１月６日-26 日まで，岩屋地区内の石屋小学校の父兄，高速船乗り場の往来者等に配布した。229 票の有効回答を得た[10]。内容としては，岩屋地区内で見られる景観の写真 10 枚それぞれにつき，岩屋らしく残したい景観かどうかを５段階で評価するものとしている。

3）景観に表出している地区住民の生活実態を調査

岩屋地区の住民に対して，町内会を持つ地域毎に，特徴的な景観の背景となっている歴史や生活実態についてのヒアリング調査を行なった。期間は，平成 22 年(2010)４月より，翌１月末まで，20 名に平均 30 分程度行った。対象区域としては密集市街地内に７地区ある小字ごとに行った[11]。

表－1　漁法別出漁漁船数・安政４年（1857）[12]

		1月	2月	3月	4月	5月	閏5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
釜口浦	建網漁	6	6	6	6	6								6
	手繰網漁						6	6	6	4	5	5	5	
	蛸壺曳漁													
	小八田網鰯漁													
下田浦	手繰網													
	縄配漁	16	16	45	45	45	45	45	45	45	45	45	45	41
	打瀬網	11												
仮屋浦	手繰網漁	40	40	40	45	120	150	150	150	150	150	150	150	50
	四艘張玉筋魚網漁	10	10	15										
	打瀬網	90												
岩屋浦	イサリ漁	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10	10
	釣漁	110	140	148	138	120	120	140	150	150	150	150	156	100
	四艘張玉筋魚網漁		3	3	8	5								
	瀬戸貝漁	30	10											40
	ごち網漁						20			20	20			
	手繰網漁													
	鰯地曳網漁									20	20	20	20	
	縄配漁	20												
	藻手繰網漁			10	10	10	10	10		20	20	20	20	10
	蛸壺曳網					10	20		20					
米馬組米相場（1石あたり）匁		81	82.5	80	82.5	86	92.5	?	96.5	98	?	102	105	117
米馬組麦相場（1石あたり）匁		51	51.5	52.5	50	55.5	60	?	64	64	?	70	74.5	82.5

（？は不明を表わしている）

3．結果

(1) 対象地の漁業を中心とした歴史についての調査

1）古代～中世

岩屋は古代から中世にかけては石屋保（いしやほ）と呼ばれていた。漁場に恵まれていることから弥生時代から海人族と呼ばれる人々が魚介類や海藻を採取して暮らしていた。承和 13 年(846)には岩屋と明石との間に連絡船が設置され，中世に入ると岩屋の船が，米・大麦・塩・薪を積んで兵庫津に入港した記録が文安 2 年(1445)の「兵庫北関入船納帳に残っており，岩屋は水運交通の点から淡路の要港であると同時に，明石海峡に面し大阪湾と瀬戸内海を扼する軍事上の要地でもあった。天正８年（1580）９月 23 日付羽柴秀吉判物によれば秀吉は「岩屋船人共」に播磨飾万津における商売を免許した。また同９年(1862)10 月 23 日付き判物では「淡州岩屋船五十七艘」に対し秀吉分国沿岸の往来を認めるなどして当地を掌握した[13]。

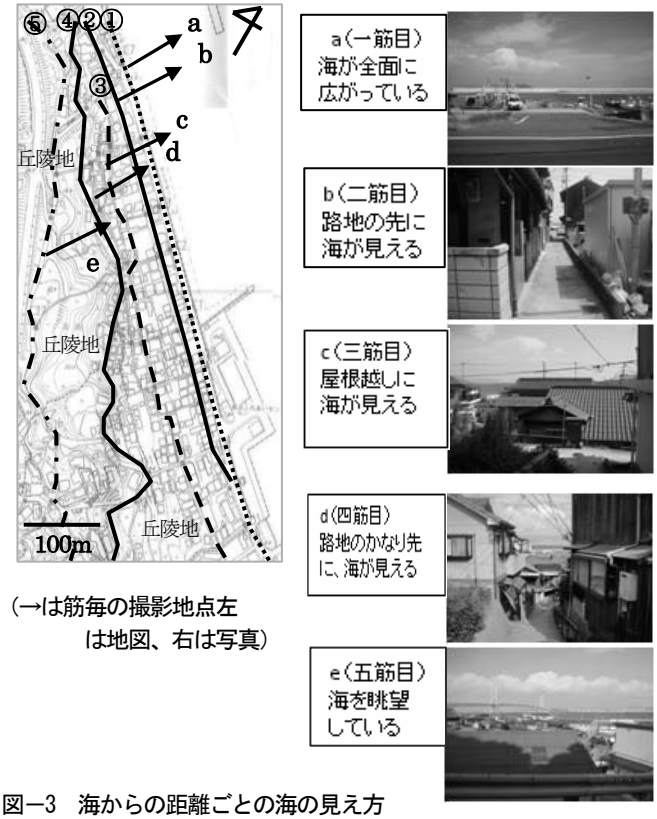
2）近世

近世に入ると，岩屋浦，または岩屋村とよばれ，もとは豊臣氏の蔵入地であったが慶長 15 年(1610)には池田忠雄領，元和元年には幕府領，そののちに阿波国徳島藩領となった。岩屋浦は近世に入る頃には既に，東ノ町・中ノ町・橋本町・西ノ町・長浜・開鏡という小字に分かれており，多くは現在でも地区町内会の単位等として使われている。

また，このころに岩屋で地曳網が始まった記録が残っており，二十二人衆と呼ばれる地曳網の網元がいるが，その先祖が秀吉の朝鮮征伐の際に小豆島まで水先案内をつとめたので，その褒賞として特権を与えられたという[14]。当時の網元の屋号は現在でも使われているものが多く，長年にわたる漁業の継承が伺われる。また漁法が多様であることも特徴であり，表-1 は安政４年（1857）の漁法別の出漁漁船数であるが，他の浦に比べると岩屋浦の漁法の江戸時代末期の淡路島北部の大阪湾側の漁業集落での漁法別多様さが伺える[13]。

3）近代

近代に入り，箙村（えびらむら）と合併し岩屋町となったが，明治25年(1892)に箙(えびら)が野島村に編入。昭和31年(1957)に淡路町の大字として岩屋となった。漁業関連では，近世から継続的に行われていた漁法が存続してきた。それに加えて，都市部への行商，海苔やシラスの加工業が行われ始めた[15]。



（→は筋毎の撮影地点左
は地図、右は写真）

図－3　海からの距離ごとの海の見え方

4）現代

平成 17 年(2005)に淡路町は津名町・一宮町・北淡町・東浦町と合併して淡路市となる。岩屋は淡路市の大字の一つとして存続している。漁業は，現代でも地域の基幹産業であり，1 次産業だけでなく，水産物の加工や造船業といった 2 次産業に発展している他，特産物のブランド化による「町おこし」への活用や釣り船，漁業体験等の 3 次産業へも展開している。

（2）地区の特徴的な景観要素に関する調査の結果

1）密集市街地の全ての交差点での調査（悉皆調査）

まず集落全体をみると，山と海に挟まれたすり鉢状の地形を有しており，港を中心に細い路地が山に向かって延びている。平野部分は狭小で傾斜のある地形でもある。

交差点における全画像を概観すると，3 つの景観要素が数多く抽出された。それらを，A. 対象地が海と山に挟まれており，海や山は，重要な景観要素として認められるので，それらを総合して「自然の景観」とした。B. また，漁業集落における日常的な生活風景が見られる景観を「暮らしの景観」とした。C. さらに主産業である生業の漁業とそれに付随する場となっている景観を「産業の景観」として以下で整理することとした。

A. 自然の景観に関して以下に述べる。まず，海の見え方を分析した。海は，交差点 256 箇所のうち，158 箇所で見えた。路地が海から山の方まで続いており，傾斜のある地形であることから，その眺望は海からの距離毎に順次大きく変化し，海沿いの道では漁船や漁具と供に漁港としての海が多くの場所で開けて見える。1 筋中に入ると路地のあい間から海が覗き見える状態が続いていく。集落の山側に近づくと，坂道をあがることで再び視界が開け，眺望的に船が行き交う海峡の景観が見られる（図－3）。

図－4　山の見え方

表－2　暮らしの景観要素が見られた画像例と交差点の箇所数

路地園芸が見られた交差点数	生活のあふれ出しが見られた交差点数	つきあいの場の見られた交差点数
161	114	18

次に山に関して分析した。対象とした交差点 256 箇所中，205 箇所の 80%の交差点で山が見えた。岩屋港を中心にすり鉢状に広がった地形であることで，集落の西側では後背の南側と東側の山が見える。集落の東側では後背の南側と西側の山が見え，集落の中ほどでは東西と後背の南側の 3 方に山が見え，集落が山に囲まれていることが，集落内においても体感することができる。そのなかでも山の見え方としては，山が見えた交差点の内 77%にあたる 157 箇所で山が路地の奥，集落の後背に見えた（図－4）。

海や山といった自然景観と，生活や産業の場が重なり合って見える場所が多いことから，自然と生活や産業が密接につながる暮らしが考察される。

次に B. の暮らしの景観についてまとめた。路地のある集住地域の特徴として，通常私的なものとして家の中もしくは住宅敷地内に置かれているもので，路地空間に設置されているもののことを指す「生活のあふれ出し」が多く見られた。その中でも対象地区では，鉢植えによる路地園芸が多く見られ，路地園芸が見られた交差点の数は，161 箇所と 63%にものぼった。他にも路地に干された洗濯物や七輪，炊事設備等の生活のあふれ出しは 114 箇所の交差点で見られた。この他にも，屋外空間に置かれたベンチや談笑できるベンチが設置されている橋の欄干，浜小屋等住民の交流する場となっている場所も 18 箇所見られた（表－2）。

このような路地や隙間で行われている「洗濯」「家事作業」「物干し」「植木の手入れ」がきっかけとなってコミュニケーションが誘発されることが金・高橋[6] の報告からも明らかとされており，岩屋地区のコミュニティの強さがうかがわれる。

さらに C. の産業の景観に関して分析した。古来，この地区で主要な産業であった，漁業関連の景観要素として，船，漁具，漁師達の作業場，住吉さんの祠，加工風景の 5 つのうち 1 つ以上確認できた交差点数は 256 箇所中 179 箇所で 70%の交差点で漁業関連の景観要素が見られた。漁業関連の景観要素がどのように見えるかというと，船は海沿いの道に加え海まで続く路地を通して見えたり，また傾斜のある地形から坂道を上がると，海岸からは，岩屋で漁業を行っている船舶が行き交う様子が見られたりした。

次に漁具に関しては，海沿いの道では海岸沿いにある漁具が見え，集落内では，自宅の前で網を繕っている漁師がいたことで漁具が見られた。漁業に関連する住吉祠（通称住吉さん）は，海沿いにあるが，路地を通して集落内からも確認できた。水産物の加工風景については，集落の屋外空間でワカメ干しが行われていたり，また海産物の露天商が鮮魚をさばいていたりする姿が見られた。

このように集落内においても，漁業関連の景観要素が多く見られたのは，岩屋地区が，生活の場と産業の場が一体となっており，また路地が海から続いていることで海沿いにある漁業関連の景観要素が集落内からも見られたからである（表－3）。

2）アンケートの結果

岩屋地区内と地区外の住民を対象として，地区内で見られる景観に対する人々の評価の傾向を調べるため，景観要素を含んでいる，岩屋地区内外の日常的な営みの中でみられる暮らしに密着し

表－3　漁業の景観要素が見られた交差点の画像例と箇所数

漁業関連の景観要素が見られた交差点数	179

た景観を選定しその10枚のそれぞれの写真に対して，「岩屋らしく残したい風景と思うかどうかの評価を因子分析した[16]。質問項目は，属性（性別は男性26%，女性は74%，年代は，20代以下が4%，30代が45%，40代が28%，50代が8%，60代以上が15%.居住地は地区内が66%，地区外が34%.），景観に関するものである。その結果，3つの因子が検出された。寄与率としては59%と3つの因子で6割近い説明力であった（表－4）。

これら3つの因子について，その因子に高い負荷量を示す画像から特徴を表わす名前付けを行った。まず，第1因子は，海産物の露天商や生活のあふれ出し，付き合いの場などの画像に高い負荷量を示すことから「暮らしの景観」と名前付けをした（図－5）。第2因子は，漁港や漁具の画像に高い負荷量を示すことから「漁業の景観」とした（図－6）。第3因子は観覧車や明石海峡大橋に高い負荷量を示すことから「新規建造物の景観」とした（図－7）。

表－4　因子分析による各写真の因子負荷量

	第1因子	第2因子	第3因子	共通する特徴
1	0.560	0.369	-0.033	日常的な生活空間，路地園芸，路地から山並みが見える画像，路地から海が見える画像などの「暮らしの景観」。
2	0.599	0.382	-0.140	
3	0.739	0.288	0.002	
4	0.890	0.150	-0.012	
5	0.767	0.154	-0.077	
6	0.231	0.585	0.209	岩屋の漁業集落の船舶，たこつぼなどの漁具，わかめ干しなどの「漁業の景観」に関わる景観
7	0.235	0.789	-0.023	
8	0.264	0.820	-0.032	
9	-0057	0.049	0.517	明石海峡大橋や大観覧車など「新規建造物の景観」
10	-0.036	-0.008	0.857	
累積寄与率(%)	27.820	48.312	59.043	

1．露天商　2．生活のあふれだし　3．路地園芸

4．山の見える路地　5．海の見える路地

図－5　第1因子「暮らしの景観」を表わす生活文化の現れた景観の画像

6．漁船　7．たこつぼ　8．ワカメ干し

図－6　第2因子「漁業の景観」を表す漁業に関わる画像

9．明石海峡大橋　10．観覧車

図－7　第3因子「新規建造物の景観」を表わす画像

3つの因子を比較すると，地域住民の生活が現れた景観が，一番強い相関を持っていることが理解される。また，漁業を中心とする産業の景観は，第2因子となっていることから，漁業に関する相関も強い。そして，住民の生活から生み出される景観要素と大きく異なった大きな建造物が景観要素となっている画像のグループが第3因子となっており，それらもまた岩屋らしく残したい景観かどうかを判断する人々の軸となっている。

次にその3つの因子に地区内外の人々の岩屋に対する景観の捉え方に差異があるのではと考え，3つの因子に含まれる写真の評価に対しクラスター分析を行った。例をあげると第1因子となった5枚の写真の得点をクラスター分析し，回答者を2つのタイプに分けた。その結果を2つにグルーピングをして，高得点のグループと低得点のグループ毎に，地域内と地域外の住民の回答の傾向を比較して分析した。2数はクラスター中心各タイプの平均を差す。タイプ1，タイプ2，それぞれのサンプルサイズの実数は，

表－5　第1因子の「暮らしの景観」に対する評価のクラスター分析と地域内外の評価の差

用いた画像	クラスタの中心		F値	有意確率
	タイプ1	タイプ2		
1.露天商	3.04	4.30	103.003	0.000
2.生活のあふれ出し	2.42	3.80	150.794	0.000
3.路地園芸	2.86	4.24	240.326	0.000
4.山	2.80	4.26	282.433	0.000
5.海	3.00	4.31	178.667	0.000

	タイプ1（低い）	タイプ2（高い）
地域内（151人）	56%	44%
地域外（78人）	38%	62%

カイ2乗検定：0.002

表－6　第2因子の「漁業の景観」に対する評価のクラスター分析と地域内外の評価の差

用いた画像	クラスタの中心		F値	有意確率
	タイプ1	タイプ2		
6.漁港	3.62	4.72	140.357	0.000
7.タコつぼ	2.82	4.49	342.279	0.000
8.ワカメ干し	2.87	4.49	316.545	0.000

	タイプ1（低い）	タイプ2（高い）
地域内（151人）	42%	58%
地域外（78人）	32%	68%

カイ2乗検定：0.002

表－7　第3因子の「新規建造物の景観」に対す分析と地域内外の評価の差

用いた画像	クラスタの中心		F値	有意確率
	タイプ1	タイプ2		
9.観覧車	2.26	4.18	283.935	0.000
10.明石海峡大橋	3.36	4.82	161.69	0.000

	タイプ1（低い）	タイプ2（高い）
地域内（151人）	30%	70%
地域外（78人）	54%	46%

イ2乗検定 0.002

表－8に示されるように地域内151，地域外78である。

その結果，それぞれの画像グループに対して，評価の高いグループと評価の低いグループに分かれたクラスターの中心値と地域平均を差す。タイプ1，タイプ2それぞれのサンプルサイズの実数は表－7に示されるように地域内151，地域外78である。内外の人がどちらのタイプに属するのかの割合を示したものが，表－5から表－7となる。

第1因子である生活文化の現れた「暮らしの景観」に対しては，岩屋らしく残したい風景かどうかに対し，地域外の人で高く評価している割合は62%と高かったが地域内では44%と低い。

第2因子の「漁業の景観」に関しては，地域内外ともに，高く評価している人の方が多かった。しかし地域内で高く評価している人の割合が58%であるのに対して，地域外の人は68%とより高く，地域内で高く評価している人は地域外と比較すると少ない。

第3因子として抽出された「新規建造物の景観」に関する評価では，地域内では高く評価している人の割合は70%と高く，それとは逆に，地域外では高く評価している人の割合が46%と少なかった。これらのことから，生活文化の現れた景観や漁業の景観に対し地域外の人は，より評価が高いのに対し，地域内の人の評価は低く，一方観覧車や明石海峡大橋といった新規建造物に対する地域内の人の評価は，高く評価している人の割合が70%と地域外の人より高く，住民にとっては日常のありふれた風景を評価しにくいことが分かった。

(3) 景観に表出している地区住民の生活実態を調査

景観の背景となる，漁業や暮らしなどの生活文化をヒアリング等により調べた（表－8）。全体を概観すると，景観に表出している生活文化としては，漁業だけでなく，漁師たちの昔から続く「浜」という組織体制毎の生活がまず見受けられた。これは，地域によって，漁業の手法が異なり，自治組織が古くから別れているものだ（図－8）。狭い海峡での漁業の歴史は，漁業の高度な専門化を促したと亀山も述べている[17]。

岩屋の漁業集落でも，漁業の差からくる魚具の差異や，各地域の慣習や祭祀，他にも海の神さまである「住吉祠」（通称住吉さん）の配置等として独自の景観が表出していることがわかった。

7つの浜における漁法の違い（船曳は船によって網を引く漁法，棒引きは，船によって棒を引き，それに網をつなぐ漁法，底引き網は船によって引く網が海の底を這うようにして引っ張られる。釣り漁は，釣り竿を用いた漁，はえ縄は，幹縄に，釣り針を先端に付けた枝縄，浮きを付けたものを用いる漁法，刺し網は海中に浮きと沈子（錘）とで帯状に張り，魚を網目にかからせる漁法，たこつぼは壺を用いてたこを採る漁，夜いさりは，夜間に箱眼鏡などを用いて魚を釣る漁，てんだい映えはフグのはえ縄，など多様な漁法が浜毎に行われている）からは，漁法や置かれている網や釣り竿，たこつぼといった漁具に違いが景観の違いをもたらしている。倉庫に関して述べると，網を使った漁を行う町の倉庫は，中で網を繕ったりして広いスペースを必要とすることから，例えば中の町では縦×横が8.5m×19m，高さ4mほどの大きさである。釣り漁が多く行われ，道具が小さい橋本や東の町では，縦×横が1m×2m，高さ1.5m程度の小さな倉庫が見られる。また，住吉祠は，海岸近くに存在するが，全く同一の形態ではない。神社は，その影響を及ぼす範囲が異なり，八幡神社が最も大きい。だんじりも各地区で工夫が凝らされている。生活のあぶれだしや路地園芸，浜子屋，付き合いの場も住まう地域や人によって多様な景観を作り出している。神社は，その影響を及ぼす範囲が異なり，八幡神社が最も大きい。（表－8）。

図－8　調査対象地区内小字

橋本を一例として，より詳細な検討を加えてみる。橋本の特徴は茶間川と呼ばれる川が存在すること，岩屋地区の中心部にあり，盆踊りなどが行われていることなどがあるが，表－8に示されているような地域の主な景観的な特徴は他の地域と共通している。春には採藻が行われ，橋本を流れる茶間川の河川敷では，ワカメを干す年中行事となっている風景が見られる。また歴史文化的背景からみると，小字毎に個性豊かな工夫を凝らしただんじりを持っている。春と秋の岩屋地区全体の神社の祭りでは橋本を含めた各小字の中から話合いを経て1，2地区がだんじりを出している。茶間川の河川敷は盆踊りをする場所にも利用されており，例年，周辺に暮らす人々が集い踊る姿が見られる。生活文化については，多くの場所で見られた路地園芸は，種や苗のやりとりを通してコミュニケーションの手段の一つになっており川沿いの道には川床園芸も見られる。

外に置かれた縁台や浜小屋では，住民が交流する場となっており，談話だけでなく，酒を持ち寄り，しばしば宴会が開かれている。近所内でのおすそ分けも頻繁に行われ，「はなだれ」と岩屋地区で呼ばれるアナゴの稚魚はおすそ分けでほとんどが消費され，あまり市場に出回らない程であるという。季節毎の収穫時には，おすそわけに歩く人々の姿が見られるという。

また行商も頻繁に行われている。景観の背景となる生活実態を調べてみると，岩屋地区では伝統的な地縁型コミュニティが現在でも存続しており，生活のそれぞれにおいて多様な営みが続けられている。漁業や祭祀，歴史や生活の文化に集約される景観の背景として，このように豊かな生活の実態が現在でも存続している。

4．まとめ

以上の結果として，連綿と続く漁業集落の歴史の中で，岩屋地区には路地と重なって見える山や海に囲まれた景観を有していることや伝統的な漁師の組織や多様な漁法が現在でも続いていることから形成されていること，また古くから習慣となっている生活や暮らし，或いは祭祀などから特徴的な景観が現れていることが考察された。宮原らによると[18]，淡路島の盆踊りは，各地でそれぞれ歌う内容や所作が異なっているという。漁業の収穫を近隣に行商した歴史的経緯[8]もあり，今でも日常的に様々な行商が見られる。また，路地という集落構造の中にある路地園芸や付き合いの場，炊事や洗濯等の生活のあふれ出し等はそこでのコミュニティの持つ交流や発信が数多く見られた。

このようなコミュニティの豊かさが感じられる生活文化の現れた景観に対し人々は「岩屋らしい景観としてこれからも残していきたいかどうか」を判断する軸としていることが分かった。また生活文化の現れた景観に対し相対的にみると，地域外の人は評価が高いのに対し，地域住民の評価は低かった。一方観覧車や明石海峡大橋といった新規建造物に対する地域住民の評価は比較的高く，住民にとっては日常のありふれた風景をあまり意識して評価していない傾向が見られた。

しかし，景観の背景となる生活実態を調べてみると，岩屋地区では伝統的な漁業やそれに関連する生活風景，そして地縁型コミュニティが現在でも連綿と存続しており，漁業や祭祀，生活のそれぞれにおいて多様な営みが続けられている。それらが「暮らしの景観」を形作ってきたのである。

表－8　小字ごとの生活実態に関するヒアリング結果

		長浜	片浜	西の町	橋本	中の町	東の町	神の前
漁法	春	船曳	船曳	船曳	棒引き、刺し網、採藻	船曳、底引き網	釣り漁	はえ縄、釣り漁
	夏	刺し網	船曳	船曳、底引き網、鯛網	底引網	船曳、底引き網	釣り漁	はえ縄、たこつぼ
	秋	船曳	底引き網、船曳	釣り漁	釣り漁	船曳、底引き網	釣り漁	はえ縄、たこつぼ
	冬	夜いさり	底引き網	たこつぼ、船曳、底引き網	釣り漁、底引き網	船曳、底引き網	釣り漁	てんだい映え(フグのはえ縄)
漁具		網、箱眼鏡	網	網、たこつぼ	釣り竿	網	釣り竿	はえ縄を入れる桶、たこつぼ
倉庫		倉庫	倉庫	倉庫	倉庫	倉庫	倉庫	倉庫
祭祀		住吉祠	住吉祠	住吉祠	住吉祠	住吉祠	住吉祠	住吉祠
		神社					八幡神社	神社
		だんじり	だんじり	だんじり	だんじり	だんじり	だんじり	だんじり
				観音寺、円徳寺				
		お地蔵さん			お地蔵さん	お地蔵さん		
					盆踊り			
生活のあふれだ		炊事場、洗濯物等	炊事場、洗濯物等	炊事場、洗濯物等	炊事場、洗濯物等	炊事場、洗濯物等	炊事場、洗濯物等	炊事場、洗濯物等
路地園芸		鉢植え、プランター等	鉢植え、プランター等	鉢植え、プランター等	鉢植え、プランター等（川床園芸も有り）	鉢植え、プランター等	鉢植え、プランター等	鉢植え、プランター等
浜子屋		浜子屋	浜子屋	浜子屋	浜子屋	浜子屋	浜子屋	浜子屋
付き合いの場					縁台	縁台		ベンチ

図－9　橋本地区に見られる文化的景観（左→右、上→下の順で、川沿いの路地園芸、山の見える路地と行商、住吉祠、橋の欄干沿いの付き合いの場、橋沿いのベンチ、わかめ干し）

5．展望

生活文化の現れた「暮らしの景観」や「漁業の景観」に対しては，社寺仏閣や雄大な自然景観といった景観要素とは違い，歴史的な，あるいは自然環境としての希少さでは地域住民の中では評価されにくいものである。しかし，そのような景観の背景となっているコミュニティの豊かさは，現代では希少な価値のある存在ではないだろうか。実際には，その地域に住む人にとっては解りにくいが，むしろ地域外の人にとっては，評価の対象となっているのである。

生活文化の現れた景観を担う住民自身がその価値を認識し，コミュニティの豊かさを，地域の豊かさを計るものさしに加えることができれば，コミュニティや伝統文化の維持保全につながり，豊かな生活文化を背景とした景観の保全と育成にもつながるのではないだろうか。

補注及び引用文献

1）水産白書（2009）：H21 水産白書：第 1 章，第 1 節漁業・漁村の置かれている現状，水産庁，125 pp

2）小泉正太郎・三国政勝（1982）：漁業地区における住居及び近隣の空間形成に関する研究その１：千葉県勝山漁業集落の調査を通して，日本建築学会論文報告集 Vol. 312，123-132

3）長坂大（1997）：集落における屋外空間の構成と変遷についての研究わが国の現代漁業集落を事例として：日本建築学会計画系論文集 Vol. 495，271-279

4）青木義次・湯浅義晴（1993）：開放的路地空間での領域化としてのあふれ出し：日本建築学会計画系論文集 Vol. 449，47-55

5）Yoshida，Yukie・Saito，Yohei・Yue，Shen(2005)：Research on the Characteristics of Potted Plant Greening & Community Development through Greening Activities：Journal of Landscape Architecture in Asia Vol1，258-264

6）金栄夾・高橋鷹志（1995）：密集住宅地の「住戸群」における路地と隙間の役割に関する研究：日本建築学会計画系論文集 Vol. 469，47-55

7）集落を通る道路は海岸線に並行するものと直交するものがある。

8）第 32 次淡路の農林水産業：（1984）：近畿農政局，301 pp

9）カメラ機種名 Cannon，IXY DIGITAL110IS，レンズの焦点距離 6.2mm，(35mm 換算)，撮影の高さ：150cm。

10）サンプリング方法は以下のとおりである。小学校父兄全員に 205 部配布，回収数は，125，回収率は 61%，往来者には，岩屋ポート（小型船舶の停留所）では 142 名全員に依頼，そのうち任意で回答した人は，104 人。全体の回収率は 70%. 使用写真は交差点の写真から抽出した。選定方法は，新規建造物，暮らしや生活の景観，産業の景観など本研究で集落内外の意識差を特に調査しようとしたものを選んだ。写真の印刷サイズは，縦 4.5cm×横 5.9cm，写真はアンケート内に挿入した。

11）自治会長や長年居住している住民の紹介などで，小字毎の漁業関係者にヒアリングした。回答人数は小字毎の 2－3 人に加えて漁業協同組合の職員 1 人。

12）淡路町誌（2005）：淡路町誌編纂委員会，淡路町教育委員会，750 pp

13）藤井容信・藤井彰民（1825 但し，1975 に復刻版）：淡路草：名著出版，全 2 巻（上 668 pp，下 615 pp）

14）和歌森太郎（1964）：淡路の民俗：吉川弘文館，446 pp

15）淡路町風土記編纂委員会（1971）：淡路町風土記：淡路町，235 pp

16）因子の抽出法は，主因子法，抽出基準は固有値 1 以上，軸の回転法はバリマックス法，クラスター分析は ward 法を使用。表 5－7 は値の高低によって、タイプ 1，タイプ 2 としているので人数の実数は異なる。

17）亀山慶一（1964）：漁業と漁業民俗：淡路島の民俗，和歌森太郎編（1964）：吉川弘文館 68-85

18）宮原兎市・牛島巌（1964）：民俗芸能の諸相：淡路島の民俗，和歌森太郎編（1964）：吉川弘文館，326-337